

汲古一紙

『扇のはなし』

むし暑い時期になりました。時節にふさわしい扇のことも話しましょう。

人の集まりの中で、少し内々に白い扇子など使っている人を見ると、ちよつと夏のすがすがしい景物にふれた感じがします。

さてその扇ですが、あおぐ用途の側からは扇子（せんす）と呼ばれ、形の側からは扇面と呼ばれている。しかし中国ではこれは便面と呼ぶようである。また書や画を描く方を文人風便面と呼び、あおぐためや礼儀のために使う方は扇面というような傾向もある。

扇子は一応あおいで風をとる用のものである。しかし本来は儀礼の具で、一年中いつでも人中出现する時は持っているべきものであったのだ。鎌倉時代の武家の図など見ると、幅の広い扇子を持つているのをよく見かける。ついこの間、東宮妃の冊立の儀の時に美智子殿下が、十二ひとえのお姿で検扇を持っていた写真がまだ街のウィンドーに見られるものである。

これらの扇の類いはいろいろに発展して種類もさまざまになり世界中でつかっているが、これは全く日本の発明に始まるもので、その発明の時期もかなり古く平安朝初期にはもう使われているから、この時分のちよつと前かあるいはその近くの時分からであろう。

初めは松扇（ひおうぎ）から夏扇、中啓、中浮（ほんぼり）となり、さらに軍扇、団扇、舞扇と用途にたがって種類もふえ、変遷して今日使われる骨数の多いものとなった。この骨数の多いものは徳川中期以後である。

松扇とか軍扇とかというものは別とし、普通は竹の骨に紙を貼ったものであるが、後に木、骨、牙、銅、鉄などのようなものを使って、あおぐ中によい匂いを漂わせるとか、あるいは扇子の形ではあるが、立派な護身用の武器であるとか、別な目的が加わったり、異を珍重するための発展である。

大変にむずかしい扇のせんさくになったが、扇には細骨と平骨と

の二つの流れがあり、細骨のものは、古代には五本の骨であったが、のち七本、八本、十本、十二本、十三本となり、これは儀礼用として武家的な風格を持つている。平骨は松扇に端を発し、十五本、十八本、二十本で、その後骨ばかりのようなものも出来てきたが、これは外国製の影響ではあるまいか。

要（かなめ）は松扇は紙縹（こより）で結んだものが本式、他は鹿の角、象牙、銀、錫、鯨のひげを用い、近ごろはセルロイドや樹脂ガラスもあるようだ。用紙も本来は鳥の子で、あるものには雁皮のものもある。この節の安ものに至っては実にさまざまで、紙も随分いい加減なものがある。しかし書画の料などに供せられるものには、中国産の雅箋紙その他のものを使ったものもあるが、これは用途のために本来の堅牢を必要とするものとは、やはり別のものである。折り方にも、浮き折と沈み折とあって、浮き折はある部分が袋になつて骨と紙との間に融通のつくもの、すなわち中啓や中浮のよう折りにたたんでも、先が開いた形になったもの、普通の扇は紙が骨にほとんど固着した沈み折である。

この扇は鎌倉末期か室町期に中国へ伝わった。ちよつと明の初期前後で、中国は手工芸の非常に巧緻なものを得意とした時代なので、白檀骨、塗り骨、象嵌骨、透し彫などの骨に、絹張り、雅箋張り、金箋紙、その他の巧芸紙などを貼って、すこぶる美術的に進歩したものがさらに欧州各国へも拡がって、ついには羽毛扇のような華美なものまで生まれたのである。

まあこんな扇のくだらないせんさくは本意でないので、このくらいにしてむしろその用い方の中のおもしろいものを考えてみたいのが、私の目的であったのである。（つづく）

〔たかむら〕、昭和五十九年七月



幾祀（昭和五十六年）